

マルコによる福音書9章20節～29節。人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。イエスは父親に、「このようになったのは、いつごろからか」とお尋ねになった。父親は言った。「幼い時からです。霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」イエスは、群衆が走り寄って来るのを見ると、汚れた霊をお叱りになった。「ものも言わせず、耳も聞こえさせない霊、わたしの命令だ。この子から出て行け。二度とこの子の中に入るな。」すると、霊は叫び声をあげ、ひどく引きつけさせて出て行った。その子は死んだようになったので、多くの者が、「死んでしまった」と言った。しかし、イエスが手を取って起こされると、立ち上がった。イエスが家の中に入られると、弟子たちはひそかに、「なぜ、わたしたちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねた。イエスは、「この種のもは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」と言われた。

主イエスとペトロ、ヤコブ、ヨハネが山に登っている間に、他の弟子たちは一人の父親から霊に取りつかれた息子のいやしを求められていた。悪霊を追い出す権能を受けていた彼らは、いやそうとしたが、できないでいた。そこへ、主イエスが帰って来られ、騒ぎの事情を聞かれた。息子は霊に取りつかれると、地面に引き倒され、口から泡を出し、歯ぎしりして、体をこわばらせるという。小さい時から、火の中、水の中に投げ込まれ、幾度か、死にそうになったと苦悩を訴えた。主イエスの前に連れて来られると、息子はすぐに、地面に倒れ、泡を吹いて転び回った。息子の病は、今日で言えば「てんかん」であろう。今は、適正な薬を処方すれば、発作は起こらず、普通に社会生活をする事ができる。

父親は、師である主イエスに「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください」と懇願した。主イエスは「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる」と厳しく応じられた。父親ははっとして、すぐに「信じます。信仰のないわたしをお助けください」と叫んだ。父親の叫びに、全く共感する。神を信じていると思い、信仰を口にす。しかし、言葉と振る舞いにおいて、神はおられないのではないかという虚無感から抜け

られない。辺見庸氏が言う「鶴つるのようなニヒリズム」に侵され、ただ流され、自分の足で立てない無様な自分自身を見る。神の前に醜態を晒して、ただ「お助けください」と祈りしかない。それが、精一杯の信仰ではないか。父親の叫びは、私の叫びであると示される。

主イエスは、その叫びを顧みてくださる。「わたしの命令だ。この子から出て行け」と宣言されると、息子はいやされた。弟子たちは、なぜ自分たちが追い出せなかったのでしょうかと尋ねると、「この種のもは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」と答えられた。信仰は、神の全き支配を信じることである。それが信じられず、思い悩む不信仰が人の常である。それでもよし。人の思いを超えて神が全支配をしておられるからである。「キリエ、エレイソン（主よ、憐れみ給え）」とひたすら乞う。